

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです
一流になりなさい。それは一流だと思ひ込むことだ。

「一流になりなさい。一流であれと考へて行動するんですよ」リーダーとして出席した新入社員勉強会。船井幸雄の話をはじめて聞くであろう 30 名の新人は、一所懸命メモをとっています。新たなリーダーとして、四年前の自分を振り返ると、今年の新人は真面目だなあと思ひながら先生の話聞いていました。「一流になるには、どうしたらよいですか？」一人の女性新入社員が、質問の手をあげました。その答えは、「一流だと、思えばいいんです」一瞬、会議室が低い笑い声で覆われました。確かに、一流ではないから一流になる方法を聞いたのです。一流だと思ひこめばよい、そう言われると、少し考へこむかもしれません。「まず一流を体験することです。体験しないとわからない」一流の眼を養うには、本物を見続けることが一番の早道です。本物を見続けると、偽物を見抜く感性が養われるのです。

「海外にいくときに、ときにはファーストクラスに乗ってごらん。エコノミークラスと比べて、その違いに一流の意味がわかります」ファーストクラスに乗る。いや給与が低い時代は、ファーストクラスのトイレを見にいくだけでよい。そう言われたな、と思ひ出していました。「誰かが出たあと、すぐに入ってごらん。手を洗うボールの周辺、ダストボックスの周辺、便器を見たらよい」エコノミークラスは、手洗いボールの回りは水でびしゃびしゃ、髪が何本も落ちています。時には、手を洗った汚れがボールのなかに残っている。ゴミはダストボックスから溢れているかもしれない。床に手を拭いた紙タオルが投げ捨てられているかもしれない。便器のなかも、汚れっぱなしのことが多い。「一方のファーストクラスは、自分が使ったあと、ちゃんと手洗いボールの周辺は拭いてある。ダストボックスも、ちゃんと紙タオルが捨ててあるはずだよ」便器回りも、汚したら自分で拭いてから出ていく人が多い。それが、ファーストクラスを使う人たち。言わば、一流の人間の振る舞い方なのだと、船井先生は語ってくれました。「確かに、本物を見ないと、わからないな」そう思うのです。百聞は一見に如かず。確かにそのとおりです。

そして、その上があります。百聞は一見聞に如かず。しっかりと見どころとその意味を聞いてみるのは、何も聞かずに見るのとまったく理解度が異なります。そう教えてくれたのは、現・湖西市長の三上元さんでした。「それは、始末をするのが一流人ということでしょうか？」「うーん。始末ということでもあるね。思ひやりといったほうがいいかな」船井先生との新入社員の応答は、そこで止まりました。

トヨタ自動車の工場をはじめて視察したとき、一番驚いたのは、やはり自動化という発想法でした。オートメーションラインで、自分の持ち場内で不具合を発見したら、その場でラインを止めてよい。自分の作業が持ち場の範囲で終わらないと、責任をもってライン全体を止めることができます。いや止めなければいけない、と教えられているのです。通常、工場ではオートメーションラインの稼働率が、利益を決めると教えられます。ですから、ラインを止めることは、最大の非効率と思われています。不具合があっても、ラインを流し続けて最後にまとめて不具合を直すほうが効率的と、大学時代に教えられました。しかし、トヨタはまったく違います。「不良品を作り続けることが最大の非効率」と教えられます。ですから、自分の失敗なら自分の責任でラインを止め、完璧にしてから次の持ち場へと流すのです。「良い品・良い考」という標語が、トヨタの工場には掲げられています。良い品は、良い考え方から生まれる、という哲学です。「良い考」とは、よりマクロの善ということなのだなと、はじめてのトヨタ工場視察で学びました。全体がよりよくなることを、部分であるあなたも考へなさい。それが、よりマクロの善です。自分だけ、いまだけがよい、という発想を捨て、全体が、そしていまも未来もよい。その発想です。それが一流の入口、ということなのです。

船井幸雄は、新入社員勉強会で一流を何と言っていますか？

()